

## 〔9〕 関連病院の施設紹介

### 独立行政法人国立病院機構 医王病院 施設紹介

現在の独立行政法人国立病院機構医王病院は、17年7月に旧医王病院と旧若松病院が統合して病床数298床となり、5名の神経内科常勤医と呼吸器内科1名で3個病棟約130床の内科系病床を受け持っています。入院患者の内訳は、その約65%がいわゆる神経難病・特定疾患で、これに旧医王病院筋ジス病棟から引き継いだ筋ジストロフィー症、先天性ミオパチーなどの患者さんが加わります（スライド1）。

旧国立療養所時代からのイメージでは、比較的ゆったり時間の流れる空間を想像される同門の先生方も多いと思います。しかし、最近の自立支援法や医療を取り巻く環境変化は医王病院でも例外ではなく、いくつかの変化が現れ始めています。その中の顕著なものが入退院数の増加です。

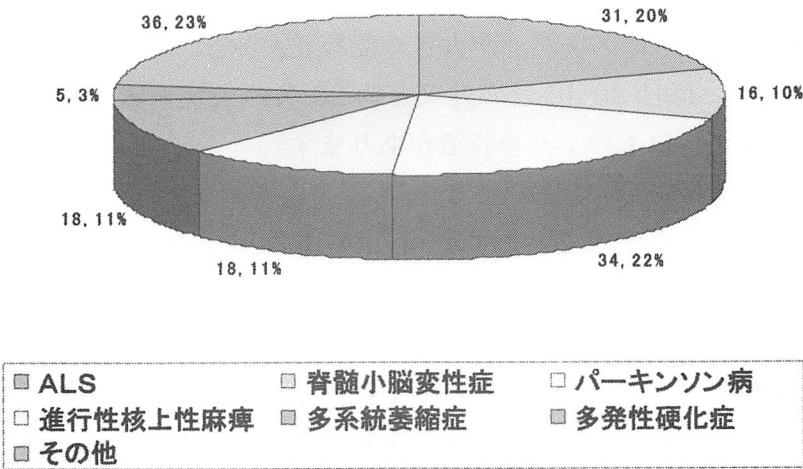
当院地域医療連携室がまとめたものを紹介しますと（スライド2-5）、平成17年7月から18年3月までの9ヶ月間に78件の入院があり、入院目的別では30件（38%）がレスパイト目的で、その他では治療検査31件（40%）、長期療養8件（10%）、退院・在宅支援が3件（4%）でした。同様に、18年4月から12月までの9ヶ月間では入院155件、目的別ではレスパイト55件（33%）、治療検査60件（37%）、長期療養14件（8%）、退院・在宅支援が22件（13%）でした。これは同門の皆様からの紹介数が増えたことと、退院先区分で紹介していますように、在宅療養支援を進めた結果、レスパイト入院を繰り返し利用される方が増えたことが大きく寄与したと考えています。この場を借りてご協力頂いている同門の皆様に御礼申し上げます。

また、平成18年5月からは石川県難病相談・支援センターの神経難病中核病院に指定され、自治体や看護協会などとも協力して神経難病の地域支援体制づくりを進めています。さらに平成19年1月からは、院内標榜ではありますが臨床研究部を立ち上げ、さらに臨床面での充実を図っています。同門の皆様にはこれからも医王病院をよろしくお願い申し上げます。

以上、文責 駒井

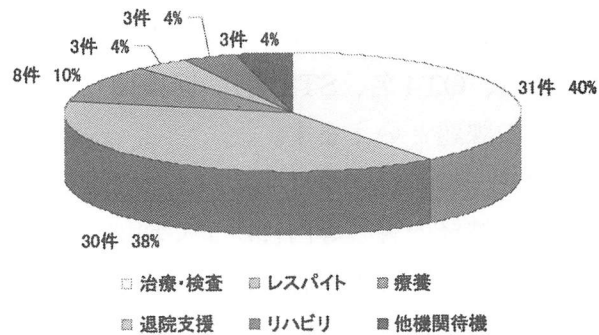
# 医王病院入院症例疾患区分

平成18年4月～平成18年12月



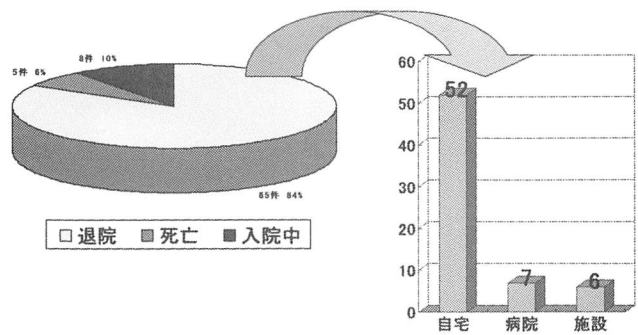
## 入院目的

平成17年7月～平成18年3月



## 退院後の転帰先

平成17年7月～平成18年3月



## 石川県立中央病院

石川県立中央病院の神経内科は約 30 年前に前任の内山先生が東京都養育院（現・老人医療センター）から赴任して開設され、石川県では金沢医科大学につぐ長い歴史があります。平成 18 年 4 月からはメンバーが大きく変わり、沖野・浜口・坂井の 3 人体制で診療にあたっています。毎日 30-40 名の外来と約 30 名の入院病床（平均在院日数 20 ～ 25 日）を診ていますが、以下のような特徴があります。

### 1. 救急がとにかく多い

最近はがん診療を重点化していますが、石川県中の identity は「決して救急を断らない」ことであり、結果として多数の脳血管障害や虚血性心疾患の患者が救急受診しています。CPA の救急車が 2 台続くこともめずらしくなく、多くの救急隊員の方々と顔なじみになれます。脳梗塞やてんかん（これも大変多い）、意識障害をはじめとする神経救急の際には頻繁に呼ばれ、入院の 8 割以上は救急外来経由という状況です。ER 病棟では脳外科・呼吸器内科とならんで常連ベスト 3 に入っていますが、神経内科医 3 名の誠実さと優しさから ER スタッフの人気度では他を寄せつけず、いつ入院があっても（たぶん）歓迎されています。

### 2. 急性期リハビリテーションが充実している

脳卒中患者が多いこともあり、この規模の病院としてはリハビリテーションスタッフが充実しています（PT12 名、OT4 名、ST2 名）。回復期リハビリテーション病棟をもつ病院との緊密な連携が今後の課題といえます。

### 3. 神経疾患がプライマリーに神経内科に来る（当然ですが）

多くの病院ではいまだに神経内科の専門性がよく理解されていないようですが、当院では職員全体に浸透しており、神経疾患の患者が回り道をして受診することはほとんどありません。結果的に比較的早期に適切な診療ができていくように思われます。

### 4. 研修医が多い（当地域では）

毎年約 10 名の研修医が加入し、全員が 8 週間神経内科をローテイトします。慌ただしい中でも大切なことを見失わないように毎朝診療前にミーティングを行い、世代間ギャップを感じることなく切磋琢磨しています。

その他いろいろとありますが、今後も地域・大学・関連病院との連携を密にして神経内科診療の向上に努めたいと思います。

（沖野 記）

## 公立能登総合病院紹介

公立能登総合病院は、七尾市と鹿島郡中能登町の1市1町で構成された七尾鹿島広域圏事務組合が運営する自治体立病院です。診療科24科で診療を行っています。

神経内科の外来業務としては、大学病院から週2回の外来応援を頂いて毎日外来診療を行っています。再診は20人ー40人前後、新患は、驚くべき事に小生が赴任して以来、小生が休暇で不在であるなどを除けば一度として0人であったことはありません（それって普通、というツッコミは無しでお願いします）。1人から多いときは十数人新患受診され、その時は8時30分から夕までノンストップ外来です。担当医はヘロヘロですが、繁盛ありがたいことです。

入院は定数17床です。が、オーバーベッドであることがしばしばです。ただし赴任1年目の一昨年は、毎日外来診療に加え入院患者数が30名近くに達することも珍しくなく、自分の限界との闘いでしたが、昨年は忙しいながらもそこまででなく、どうやら赴任1年目が当たり年であった様です。繁盛ありがたいことです。

当院の大きな特徴としては、24時間MRIを始めとした画像検査がavailableであり、救急脳卒中診療に携わる者にとっては大きな力となっています。ただし最近はすぐにDWIをみる悪癖がついている気がして、まずは神経学的部位診断を大切に、と自戒もする日々です。

当院は大きな赤字を出している病院として報道され、職員はこんながんばってるのに、と一時悔しい思いもしましたが、新院長となり、7対1看護の実現や地方公営企業法の全部適応に向けた動きなど経営改革が実を結びつつあるようで、末端である小生も微力ながら、医師として自己矛盾のない範囲で病院に貢献できるよう努力したいと思っている今日この頃です。

自身も含めた小生以降、当院は若造ともベテランとも言えない医師が一人医長として赴任し、苦勞しながらも独り立ちに向けた礎を築くための修行の場ともなっていく気がします。周りに遊ぶところは少ないですが、仕事に集中し、疲れ切ったらぶらりと和倉温泉に出かけ、と、人生の一時期がむしゃらに臨床経験を積むには良い病院と太鼓判を押します。若手先生方はチャンスがあれば是非自ら手を挙げられることをお勧めしたいと思います。

(文責 柳瀬大亮)

## 〔8〕金沢大学大学院脳老化・神経病態学（神経内科学） および金沢大学医学部附属病院神経内科名簿

（2006 年 1 月から 12 月現在）

教 授	山 田 正 仁
保健管理センター教授	吉 川 弘 明
助教授（医局長）	岩 佐 和 夫
講 師（教育長）	石 田 千 穂
助 手（病棟医長）	高 橋 和 也
助 手（外来医長）	小 野 賢二郎
大学院	古 川 裕
大学院	坂 井 健 二
大学院	篠 原（野口）もえ子
大学院	佐村木 美 晴
大学院	本 崎（加藤）裕 子
大学院	浜 口（柴田） 歩
大学院	野 崎 一 朗
大学院	町 谷 知 彦
大学院	森 永 章 義
大学院	島 啓 介
大学院	能 登 大 介
大学院	池 田 芳 久
大学院	池 田 篤 平
海外留学	吉 田 光 宏（カリフォルニア大学デービス校）
クリニカルクラークシップ	坂 本 光 弘（4～5 月）
クリニカルクラークシップ	佐 藤 啓（6～7 月）
名誉教授・非常勤講師	高 守 正 治
非常勤講師	垣 塚 彰（京都大学教授）
臨床教授	駒 井 清 暢
臨床助教授	新 田 永 俊

臨床助教授	沖 野 惣 一
臨床講師	坂 尻 顕 一
診察協力医	廣 畑 美 枝
診察協力医	山 川 祐 賀 子
診察協力医	松 本 泰 子
研究協力員	横 地 英 博
研究協力員	丸 田 高 広
研究協力員	柳 瀬 大 亮
研究協力員	浜 口 毅
研究協力員	枝 廣 茂 樹
大学院修士課程	小 瀬 健 治
薬学部大学院	鈴 木 康 大 (3 月修了)
薬学部大学院	深 澤 秀 一
薬学部大学院	稲 岡 義 浩
薬学部大学院	梅 下 翔

検査技師	山 口 ゆかり
検査技師	角 田 由美子
臨床心理士 (産学連携研究員)	鈴 木 絵里子
心理士	本 田 こず絵
保健師 (クラスター事業研究員)	木 下 浩 美

教授秘書	辻 口 悦 子
事務員	中 田 理 砂
事務員	澤 田 和 子
事務員	米 原 洋 子
事務員	山 岸 浩 子 (6 月まで)
事務員	蔵 谷 久 美 (7 月から)

## 編集後記

平成 18 年の医局では、金沢大学医学部附属病院再開発事業および金沢大学（宝町）総合研究棟改修施設整備等事業に伴う 2 回目の引っ越しが行なわれた。1 回目の引っ越しでは、旧 6 病棟 2 階から第 2 中央診療棟 5 階（旧 1 病棟 5 階）への引っ越しであり、今回は第 2 中央診療棟 5 階から医学部 A 棟 2 階（旧薬学部 2 階）への引っ越しとなった。これまでの、医局は、約 118 m<sup>2</sup> とかなり広々としていたが、新医局は、44 m<sup>2</sup> となり、やはり狭さを感じてしまう。一方、研究室はこれまで以上に広く配置することができ、研究環境は、少しは改善したと考えたい。

引っ越し当初は、病院と医学部 A 棟の間に渡り廊下がなく、一度、屋外に出てから、病院へ向かうという環境であった。平成 18 年 11 月には、これも改善され、病院と医局とをつなぐ渡り廊下が作られた。廊下の室温管理はできないため、冬は外部以上に寒く、恐らく、夏は外部以上に暑くなると思われる。

この数年来、医局の引っ越しなどのハード面での変化だけでなく、チュートリアルやクリニカルクラークシップの導入、医学部卒業後の初期研修などの医学教育制度、個人情報管理など倫理的な管理を厳格にふまえた研究の遂行、包括医療制度など、ソフト面でも大きく変化を遂げている。業績集の内容も、これらの影響をうけ変化していることが見て取れて面白い。

これらの変化の中で、対応しきれない時にとる行動が“とりあえず”である。“とりあえず”で対応しておくことは必要悪ではあるが、仮の状況である“とりあえず”が、その後の状況や制度の姿に変わってしまい、慣れることで、違和感さえ感じなくなってしまうことには、常に注意しておく必要がある。変化を遂げることが、進歩・進展には必要であるが、“とりあえず”行ってしまったことについては、繰り返し振り返り、本来とるべきであった対応を考える努力が必要である。これを行わないと、最善と思われた変化は、単に古いものを置き換えただけのものになり兼ねない。業績集には、この一年の努力の成果をまとめるだけでなく、この“とりあえず”を改めて見直す機会にもなると思われた。

最後に、業績集の編集にあたりましては十分校閲致しましたが、誤字脱字・論文の掲載もれ等、気づかない点もあるかと思いますが、これらの誤謬につきましてはこの場をかりてお詫び申し上げます。

（医局長 岩佐和夫）

---

---

## 金沢大学 神経内科 年 報 第7号(2006)

2007年4月1日 発行

発行： 金沢大学大学院 医学系研究科 脳医科学専攻  
脳病態医学講座 脳老化・神経病態学(神経内科)

〒920-8640 金沢市宝町1-3-1

TEL(076)265-2292 FAX(076)234-4253

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~med19/>

印刷： 笠井印刷所

金沢市旭町2-3-17 ☎076-232-0052

---

---